



田村市立都路中学校 学校だより 第15号

令和7年7月15日（火）

発行責任者：校長 佐藤 仁

TEL：0247-75-2009

めざす生徒像：自らの志を語り、目標に向かって主体的に努力できる生徒

めざす学校像：志を育む学校 学び合い、高め合う学校 信頼され、愛される学校

終戦80年に思うこと

1945年に終戦を迎え今年で80年です。新聞やテレビ、ネットでも、戦争を生き抜いた元軍人の方の回想や一般の方の苦悩を取り上げた企画が多くなってきました。80年前に起きた戦争を、遠い昔の出来事にとらえるのは、言葉は厳しいですが無責任のように思います。戦争や戦後の戦争裁判の是非は別として、80年前に何があったのか、その事実を知り、国のために命を落とした（落とさざるを得なかった）人々に思いをはせることが大切かと思えます。

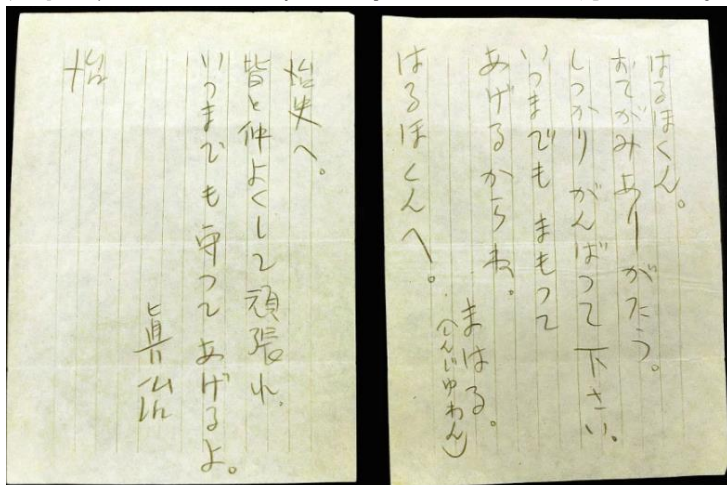
前号の学年だよりでも取り上げましたが、私の祖父の墓標には「南方にて死す」という言葉のみが刻まれています。28歳で戦死しました。祖母の話では、お墓には遺髪（祖父本人のものと思われる）が納められています。南方に送られた何万という軍人の一人としてどのような最後を遂げたのか、知る術はありません。戦争で夫を亡くした祖母は女手一つで子ども（私の母）を育てました。仕事をいくつもかけもち、朝から晩まで働いたそうです。若い時の苦労が原因か、晩年は足腰を痛め自力で立ったり歩いたりすることができなくなりました。最後は穏やかな表情で逝きました。

私は若い時に何度か祖母に、祖父について「どんな人だったのか」、「召集令状が来た時の様子」、「出征する時の様子」などを尋ねたことがありました。祖母は多くを語ろうとはしませんでした。遠い昔のこととはいえ、若くして夫をなくし苦労を強いられた頃のことを思い出したくなかったのだと思います。祖母は私に、軍服姿の祖父の写真や召集令状、当時の内閣総理大臣からの感謝状を見せてくれました。軍服姿の祖父は出征前の鬼気迫る表情とは無縁の穏やかで、凜々しい姿でした。その祖父が出征してすぐに、祖母の妊娠がわかりました。戦後、生活のためのあらゆる物資・食糧が不足し、生きるだけで精一杯の時期に祖母がどれほど追い詰められた状況だったかは想像に難しくありません。嫁ぎ先の祖父の実家を出て、寝る間も惜しんで仕事と子育てにあけくれたことと思います。子ども達を立派に育てることは戦死した夫への愛情表現の一つであり、生涯をかけてまっとうしなければならぬ務め・責任だったのだと思います。

太平洋戦争での日本人の犠牲者は310万人です。うち市民の犠牲者は80万人。310万人の人々それぞれに親がいたり子どもがいたり、家族がいました。私の祖母の戦後の生き方同様、戦争により命を落とした310万人の遺族の方々が強いられた戦後の苦難は簡単に言葉で形容することは難しいです。

当時の時代背景から、国のために軍人となり殉死することが日本人に求められた生き方でした。

それは軍人となった本人だけでなく、家族にとっても誇りでした。国のために死ぬことが美化された時代において、戦地に赴き明日死ぬかもしれないという極限状況の中で多くの軍人が家族や友人に遺書を残しています。戦後80年を迎える今年、「生きる」ことの定義・目的が戦時中のそれとは全く違う今、個人の自由が保障されている現代において、死を目前に紡ぎ出された言葉は、家族や愛する人への思いを綴ったものが多いです。80年前に一死をもって、国を、家族を守ろうとした人の思いを知り、人として当たり前の生活を送ることができる今の社会の礎を築いた先人達に思いをはせる時間をもちたいと思います。



ある軍人が残した弟への遺書